



日本記者クラブ記者会見

未来に目を向けた友好関係を

鄧小平 中国副首相

1978年10月25日

p2

中日友好の新たな高まり

p3

四つの現代化実現のために・覇権反対の原則

p4

日本の全方位外交

p5

対米関係の正常化・朝鮮問題・農業の現代化

p6

遅れを認める

p7

「尖閣列島」は棚上げに

© 日本記者クラブ

酒井新二理事長(司会) それでは、鄧小平副総理の記者会見を始めたいと思います。初めに簡単にご紹介を申し上げたいと思います。

本日、日本記者クラブに鄧小平副総理をお迎えしたことは、我々として非常に大きな喜びであり、かつまた意義の深いことだと思っております。鄧小平副総理がこの種の記者会見にご出席になったのは、おそらくこれが初めてだろうと思います。このことから、現在の中国の新しい開かれた姿勢を、我々は感ずるわけです。

鄧小平副総理については、いまさらご紹介するまでもありませんけれども、近代化、現代化を推進しております中国の象徴的な人物であり、またこの十年間、中国において激動の中を戦い抜かれてきた革命の士でもあります。また副総理は、ご承知のように、自らの所信を極めて大胆に、率直に語られる方です。その意味から、我々ジャーナリストにとっては「得難き友」だと言っても良いと思います。

現在、日中平和友好条約の批准書が交換され、日中間には非常に友好の空気が盛り上がっていますけれども、「友好は得やすく理解は難し」という言葉がありますように、いたずらに日中友好の熱に浮かされることなく、真の相互理解を深めることが非常に大事だと思います。その役割は、まさに我々ジャーナリストのものだと考えています。今日の記者会見もその一環です。

本日は、時間が少なく残念ですが、この点、副総理から率直なお答えをいただけることを、心から期待しています。全体が一時間でございまして、始めに副総理からご所見をいただくわけですから、実質的な質問の時間はさらに短くなります。そこであらかじめ、会員の皆さんから質問を集め、それを整理して、代表質問という形をとることにしました。この点をご了解のうえ、ご協力をお願いしたいと思います。代表質問は、日本記者クラブの副理事長であり、日本経済新聞の編集局長である、小島章伸氏をお願いいたしました。

それでは早速、副総理の所見を伺うことにしたいと思います。

鄧副首相 尊敬する酒井新二先生、報道界の友人の皆様。まず最初に、日本記者クラブが今日の記者会見を催してくださったことに対し、感謝の意を表します。私どもは、日本政府のお招きをいただき、紅葉のさわやかなこの秋に、貴国に対する友好訪問を行い、中日平和友好条約の締結と発効を共に喜び、お祝い申し上げることを非常に欣快に存じます。

ここ数日来、私どもは貴国政府、人民、および各界の友人から丁寧な歓待と情熱のこもった歓迎を受け、深い感銘を受けております。ここに日本の報道界の友人の皆さんを通じて、日本政府と各界の友人に改めて衷心よりの感謝の意を表し、偉大な日本人民に敬意を表します。

中日友好の新たな高まり

中日両国人民は、2000年にわたる友好往来の歴史と、長い伝統を持つ友情で結ばれています。中日友好は、悠久の歴史の流れを持ち、しっかりとした基礎の上に築かれています。中日両国間には、かつて一時期、不幸な歴史がありました。そのために中国人民は大きな災難を被り、日本人民も少なからぬ損害を受けました。しかし、2000年余りの友好的な歴史に比べれば、これはやはりごく短期間のものです。

現在、中日両国間の友好往来は、新たな高まりを迎えつつあります。私たちは前方に、そして未来に目を向け、中日両国人民の子々孫々の友好のために、共に努力していかねばなりません。

1972年9月に、中日国交正常化が実現されて以来、両国関係は大きな発展を遂げています。両国政府間の諸協定が調印され、両国の経済貿易関係は日増しに拡大し、文化交流は日一日と頻繁になり、両国の友好往来は著しく増加し、中日友好は一層人々の心に深く根をおろしています。

中日平和友好条約は、先日、北京で正式に調印され、一昨日は双方により東京で批准書を交換しましたが、これによって、10月23日から正式に発効しました。

中日平和友好条約の締結は、両国政府と人民が共

に努力し、妨害を取り除いて収めた極めて大きな成果であります。中日両国人民はそれを喜んでおり、平和を愛する世界のすべての国と人民も、それを喜んでいます。

中日平和友好条約の締結は、中日国交正常化に続く、両国の関係における大きな出来事です。この喜ばしいときに私は、華国鋒総理を代表し、中国政府と人民を代表して、日本政府と日本人民に最も熱烈な祝賀の意を表し、長期にわたって中日友好と、中日平和友好条約締結促進のために、たゆまない努力をはらってこられた、日本の朝野の方々と各界の友人の皆さんに、心から感謝の意を表します。

中日平和友好条約の締結は、中日善隣友好関係のために、一層確固とした基礎を作り上げ、政治、経済、文化、および科学技術などの面における両国間の友好交流を一層強めるために、より広々とした前途を切り開いています。これは両国人民の根本的な利益と、共通の願望に合致しています。中日両国間の善隣友好関係の一層の発展は、疑いもなく、アジア太平洋地域の平和と安全を守るうえで、積極的な影響を与えるに違いありません。

四つの現代化実現のために

中日両国人民は共に平和を愛しています。私どもは、第二次世界大戦中におかれた広範な日本人民の境遇に同情を寄せており、平和を求める日本人民の強い願望を十分に理解しています。中国人民もまた、自分の国家を建設し、一日も早く四つの現代化を実現するために、平和な環境を必要としています。

しかし、私たちは次のことを見て取らざるを得ません。つまり、今日の世界は決して安定しているわけではありません。覇権主義者はいたるところで、すきさえあれば手を伸ばし、世界の平和と国際の安全を著しく脅かしています。

新たな世界大戦の危険は客観的に存在しています。私たちは戦争の危険の増大を、ありのまま人民に伝える必要があります。各国の人民が警戒心を高め、団結を強め、準備を整え、覇権主義の戦

略的配置をくるわせるなら、戦争を遅らせることは可能です。

中国と日本は、共に覇権主義の現実的な脅威に直面しています。中日平和友好条約は、中日両国は覇権を求めず、また他のいかなる国、または国の集団が覇権を求めることにも反対することを、明確に規定しています。

これは、国際条約の壮挙です。反覇権条項は、まず中日両国が自国を拘束し、覇権を求めない義務を担うと同時に、他のものが覇権を求めることにも反対し、だれであろうと、覇権を求めるものがあればそこに反対します。

覇権反対の原則

中日平和友好条約が、覇権反対の原則を明確に規定したことは、今年の国際情勢のもとで大きな意義を持っています。中国は永遠に覇を唱えません。現在、覇を唱えないだけでなく、将来四つの現代化を実現した、強大な国になったときも、決して覇を唱えません。これは、毛主席が生前私たちのために定めた国策であり、既に明確に中国の憲法に記入されています。

私どもは中日双方とも、中日平和友好条約の覇権反対の原則を永遠に順守するよう、自分の子孫に教育することを希望します。

四人組が粉砕されたのち、中国に安定団結し、大きな意気込みで社会主義建設に励む、すばらしい局面が現れています。中国人民は華国鋒主席をはじめとする中国共産党中央の指導のもとで、大いに奮い立ち、闘志に燃え、新たな調整を開始し、今世紀中に我が国を農業、工業、国防、科学技術の現代化した社会主義強国に築き上げるために奮闘しています。

もちろん、中国は現在、経済的にも科学技術の面でも、まだ立ち遅れている国であり、我が国の工業や農業の水準はまだ大変低く、私どもの任務は並々ならぬものがあります。しかし、中国人民は何年かの刻苦奮闘を経て、自分の目的を達成できる決意と確信をもっています。私どもは自立更正の方針を堅持すると同時に、外国のすべての進ん

だ経験をも学ばなければなりません。私どもは、偉大な日本人民に学びたいと思っています。

中日両国は、社会制度、社会体制を異にしているとは言え、私たちの間には数多くの共通点を持っています。中日両国は団結を強め、互いに協力し、中日平和友好条約の諸原則を貫き守り、言ったことは必ず実行し、やったことは必ず成果を上げ、中日関係を絶えず前進させ、アジア太平洋地域の平和と安定を守るために、たゆまない努力をはらうよう希望します。

私どもは、中日両国人民が子々孫々にいたるまで友好的に付き合っていくことを念願し、日本人民が繁栄と隆盛を勝ち取り、たえず新たな成果を収めるよう祈ります。どうもありがとうございます。

質 疑 応 答

酒井 どうもありがとうございました。それでは早速代表質問に入りたいと思います。小島さん、お願いします。

小島章伸副理事長 代表質問をさせていただきます。最初の質問は、日中平和友好条約に関連したものです。

ただ今、副総理はスピーチの中で「覇権主義がいたるところで世界平和を脅かしており、新たな世界大戦の危険が客観的に存在している」と言われました。我が国の政府は、ご承知のように全方位外交を唱えておりまして、すべての国と仲良くしよう、ということをもットーにしているわけです。けれども、この点、世界情勢の認識、判断について、かなり大きな違いがあるように思うのですが、副総理はどのようにお考えになっておられるか。これが第一点です。

第一の質問の第二点です。この条約の中国における世界戦略の中での位置付けと関連しまして、中国とアメリカの関係の正常化をいつごろとお考えなのか。日本においては、来年にもという見方が強いわけです。これが第二点。

第三点です。アジアには申すまでもなく朝鮮問題、

ベトナム問題、緊張の芽というか要素というのがございます。今日、副総理は福田首相との間で「朝鮮に緊張状態はない、ということで意見が一致した」と言われるわけですが、この点について、我々と申しますか、現実に緊張状態があるという見方に対して、どういうふうにお考えになっておられますか。

この三つをお願いいたします。

日本の全方位外交

鄧副首相 ご質問に答えるのに正確ではないかもしれませんが。間違ったことを言いましたら、どうぞ批判をしてください（笑い）。

この覇権主義反対ということは、中日平和友好条約の中の核心であります。平和と友好を求めているのですから、私たちはアジア太平洋地域の平和と安全を求め、世界の平和と安全を求めています。それを求める以上、覇権主義に反対しなければなりません。

日本政府は、その国策として全方位外交を決めておりますが、それは咎める余地がないと思います。私個人の理解で申しあげますと、いわゆる全方位外交というものは、あらゆる国との友好関係を求めることである、と思います。もしこういう意味から申しあげるならば、中国の外交もやはりそういう全方位になります。しかし、中国の外交にはもう一つ、もう一カ条付け加えました。つまり、だれでも覇権主義を求めるなら、我々はそれに反対するということです。

中日平和友好条約に含まれている意味からして、もし他人が覇権主義を日本の頭に押しつけるなら日本もそれに賛成はしない、と私は思います。私たちから言えば、私たちはすべての国々が平和的に付き合うことを願っております。

ところが不幸なことに、現実に世界のいたるところで覇権を求めようとしている者がいます。そして、この覇権主義こそが国際間の不安定をもたらしている根源であります。中国の見解は、先ほどの話の中で申しあげましたので、ここで繰り返しません。

対米関係の正常化

二番目の問題は、中米間の正常化の問題ですが、これは中米間で相談しております。このことも大勢の赴くところであると考えます。中米関係は一九七二年に上海コミュニケが発表されて以来、ますます発展してきております。現在でも引き続き発展しております。しかしまだ正常化しておりませんが、その正常化の障害は台湾問題にあります。

そこで、中米関係の正常化実現の条件として、私たちは三カ条出しております。つまりアメリカと台湾の関係です。次の三カ条が実現されなければなりません。それは第一に条約を破棄すること。第二に軍隊を撤去すること。第三は国交を断絶するということです。この面について我々は、米政府の考慮を待っております。

朝鮮問題

朝鮮の問題については、確かに午前中の会談において福田首相とお話いたしました。双方のそれぞれの見解について、意見の交換をしました。私は、朝鮮民主主義人民共和国については理解を持っております。

中国の朝鮮問題に関する政策は、皆さんもご承知のことだと思います。私たちは一貫して金日成主席と朝鮮民主主義人民共和国の打ち出している、自主平和統一を、そういう政策を支持しております。

そして私は福田首相に申しあげました。つまり「私たちの知っている範囲では、相手が行動に出るというようなことはいま存在していない」と率直に申しあげました。南方の方でさえ手足を動かさない限り、緊張情勢は存在しないと思います。

その問題は、南北対話の条件を作り出すということにあると思います。まさに金日成主席が言っておられるように、自主的に平和に統一をすることについて相談する、ということです。

そこで、この南北対話の条件を作り出すということですが、やはりその前提として、アメリカが朝鮮から軍隊を引き上げる、ということです。要するに、現在において、朝鮮における緊張した情勢というのは見られません。

私たちは、いかなる国でも人為的にそれを二つに分けてしまうということは、これは将来必ず解決できると、一貫してこういうように考えております。二つのベトナムの問題がすでに解決されました。ベトナムが現在、中国に反対しているとはいえ、ベトナムが自国の統一の問題を解決したことは正義なことであると考えます。

その他にまだ二つの国が存在する、つまり一つの国が二つに分かれているという状態がまだたくさんあります。いまは二つの朝鮮のことについて申しあげました。二つのドイツの問題もあります。二つの中国の問題もあります。一つの日本ともうあと100分の1の日本、ということが存在しているでしょうか。

そういう問題は必ず解決できると思います。10年でできなければ100年、100年でできなければ1000年でも解決できると思います。こういう民族の願望、こういう歴史の流れというものは、これは逆らうことのできないものです。

ベトナムについては、人々から「東方のキューバ」というふうに呼ばれておりますが、私もそういう論談に賛成します。これ以上申しあげることがございません。

小島 それでは第二の質問です。中国は現在、四つの近代化計画を進めておられます。副総理は指導者として、その近代化計画のどこに力点を置いて指導しておられるか。また、日本への期待について伺えたらと思います。

例えば、政府借款の可能性についてはどう考えておられますか。また、日中関係において、政府間定期協議のようなものを具体的にお考えになっておられないか。今度のお話し合いの中で、定期協議についてどの程度話し合われたか。その点をお伺いしたいと思います。

農業の現代化

鄧副首相 皆さんもご承知のように、中国は自分の目標を定めました。それはつまり、今世紀中に農業、工業、国防、科学技術の現代化を実現することです。この四つのうち、重点がどこに

あるかということはいえないと思うのです。お互い関連しあっている問題です。

我々の経験からすると、お国もそういう経験があるように聞いておりますが、やはり農業が一番大事だと思います。農業は工業よりも難しいです。ですから、我々は農業に注意を与えます。ここで、私たちが言っている「今世紀中に現代化を実現する」ということは、もっと正確に言いますと、つまり、そのときの水準に近づけるということです。

世界は猛烈な勢いで前進しています。そのときのレベル、例えばお国の場合でも、決して現在の水準ではないと思います。我々がそのときになって、現在の日本、欧州、あるいはアメリカの水準に達するというのも、そう生易しいことではないと思います。

ですから、22年後のそうした国々の水準に達するという事は、なおさら難しいです。こういう困難を我々はよく見てとっております。しかしそれでも私たちは、こういうふうに大きな目標を定めました。私たちは自分たちの条件をもよく考えております。

そこでもっとも大事な条件というのは、我々中国全体が、つまりみんな心をつにしているということにあると思います。これは四人組を粉砕してから現れました、非常に良い政治的な情勢であります。

第二の条件は、我々中国は貧乏ではありませんけれども、資源が大変豊富であるということです。

第三の条件は、正しい政策がなければならない、ということです。つまり、この政策というものは、よく学び取るということにあると思います。私たちは、現在の国際間のすべての進んだ技術、進んだ管理方法、そういったものを組み入れて、自分の国を発展させる出発点にしたいと思います。

遅れを認める

そこでまず、自分が遅れているということを認める必要があります。顔が醜いのに、美人のようにもったいぶってはいけません。醜いところは覆い隠すことはできません。正直に遅れてい

ることを認めることに、希望があると思います。

もう一つは、よく勉強するということ、学習するということです。今度も、お国を訪問いたしました、やはり日本にいろいろ教えていただき、ということです。私たちは発展しているすべての国々に教えていただきたいと思っております。それから第三世界の貧しい友人たちの、そういった良い経験も、私たちは学び取りたいと思っております。このような態度で、このような政策、方針で臨むならば我々には希望があると、自信に満ちております。

そこですが、中日双方の間で、この面における協力の場というのは、大変大きいと思っております。日本に学ぶところはたくさんあります。日本の科学、技術、ひいては資金に、それを組み入れるということもたくさんあると思っております。

現在すでに、中日間に民間の長期貿易取り決めというものできておりますが、それだけではまだ不十分だと思います。それは200億ドルになっておりますが、なお倍、倍と増やさなければいけないと思っております。我々中国が発展さえすれば、この協力の道はますます広がってくると思っております。

ここにはこういう問題があります。私はヨーロッパの友人に会いました。するとむこうは、「日本とこれだけ協力するなら、我々はやる仕事なくなるではありませんか」と。私は「そういったことは心配いりません」と答えました。「ヨーロッパは、どうぞ日本と競争してください」と言いました。

中日平和友好条約の調印と効力発生によって、もちろんこれからの中日両国、中日両国人民間の協力が発展されると思っております。両国の政治、経済、文化、科学技術など、あらゆる分野において今後の協力を増進させたいものです。両国の往来、留学生の交換、あるいは参観訪問、そういったことも全部含めて、民間のそういった交流も増大させなければならないし、政府間の接触もまた頻繁にすべきであると思っております。

そこでなのですが、一つの固まった形式を決める必要はないと思っております。この点については福田首相との会談の中で、一致した見方を見いだしました。

小島 それでは副総理にぜひお願いしたいのです。あと二つお答えいただきたいと思うのです。一つは尖閣列島の問題です。尖閣列島の帰属について我々は、日本固有の領土である、信じて疑わない、という立場にあるわけですが、トラブルが中国との間に生じて大変遺憾に思っているわけです。この点、副総理はどう考え、この問題についてどうお考えになるか。

もう一つはご感想を伺いたいわけです。副総理は「良いことがあれば疲れない」とおっしゃって、訪日されてから精力的に歩いておられて、私たちもびっくりするぐらいです。これまで日本を見られて、どういうご感想を持たれたか。特に天皇に会われて、お話し合いになったわけですが、そのご印象を聞かせていただければと思います。

「尖閣列島」は棚上げに

鄧副首相 先ほどのご質問の中で、借款の問題をお答えするのを忘れました。これは政府間の借款については、我々はまだ考慮しておりません。これから研究する問題です。

尖閣列島は、我々は釣魚諸島と言います。だから名前も呼び方も違ってあります。だから、確かにこの点については、双方に食い違った見方があります。中日国交正常化の際も、双方はこの問題に触れないということに約束しました。今回、中日平和友好条約を交渉した際もやはり同じく、この問題に触れないということで一致しました。中国人の知恵からして、こういう方法しか考え出せません。

というのは、その問題に触れますと、それははっきりいえなくなってしまう。そこで、確かに一部のものはこういう問題を借りて、中日両国の関係に水を差したがっております。ですから、両国政府が交渉する際、この問題を避けるということが良いと思います。こういう問題は、一時棚上げにしてもかまわないと思います。10年棚上げにしてもかまいません。

我々の、この世代の人間は知恵が足りません。この問題は話がまとまりません。次の世代は、きっと我々よりは賢くなるでしょう。そのときは必ず

や、お互いに皆が受け入れられる良い方法を見つけることができるでしょう。

今回の訪日に当たりまして、日本政府と日本人民に非常に温かいご歓待をいただきまして、大変感銘を深くしております。今回は福田首相と、十分に、国際問題と中日両国間の問題について意見の交換をいたしました。我々が話し合った問題は、皆さんはもうご承知だと思います。非常に大事なことは、両国の指導者がこういうふうに随時話し合いをするということ、これは非常に有益なことであると思います。

それから各方面における、私たちがいただいたおもてなしにも、私たちは大変満足しております。今日はこんなに長く皆さんの時間をとってしまって、大変すまなく思っております。そこで総じて言えば、本当に非常に喜んだ、嬉しい気持ちで日本を訪問し、これからもまた、そういう嬉しい気持ちで帰国することができると思います。

それから、天皇陛下との会見というご質問がございました。今回、私たちは天皇陛下と皇后陛下から、非常に丁寧なご歓待をいただきました。それに感謝の意を表します。

天皇陛下との会見の時間も短くはありませんでした。午餐会も入れて二時間以上でした。そしてお互いに過去についてお話ししました。しかし天皇陛下は、過去よりも未来に目を向けられている、ということに私たちはよく注意いたしました。天皇陛下は中日平和友好条約の調印に、非常に関心をよせられていました。

酒井 まだ伺いたいことはたくさんございますけれども、時間がまいりましたので記者会見を終わりたいと思います。副総理には、重ねて非常にご多忙の中を、我々のために時間を割いていただいたことを感謝申し上げます。ありがとうございました。

通訳・王效賢

文責・編集部